

## VII 女性と環境行動

### —都民の水環境意識調査報告その7—

1. 本章の課題意識
2. 環境保全行動をめぐる男女差
3. 日常的環境行動と女性内部の差異
4. まとめにかえて

木本喜美子\*

#### 要 約

本章の目的は、女性の日常的環境保全行動を中心にとりあげ、その男女差および女性の内部的差異の考察にある。その背後には、ジェンダー・センシティブ（性別にこだわった）分析が、社会運動研究に不可欠であるという問題意識がある。それはすなわち性別役割分業構造のもとの性別役割が主体の行動を制約したり促進させたりする側面への注目は、社会運動を担う主体の状態を考察する上で重要であるからである。本稿では社会運動そのものについての考察ではなく、日常的行動にしばった分析をしているが、こうしたレベルの行動は社会運動にとってのもっともベーシックな基底をなし、両者を結ぶさまざまな媒介経路と契機を想定することができる。本章は女性の環境保全をめぐる日常的行動の実態とその意味を分析することから、こうした課題に接近しようとするものである。われわれの調査データによれば、男性と比べた場合の女性の特徴は、個人的レベルでの日常的環境保全行動においても、地域・生活密着型の集団的行動への参与というレベルでも、よりアクティブであるということである。環境問題への情報源も活字媒体に依存する傾向の強い男性型とは明らかにちがって女性は、家族、近隣等のフェイス・トゥ・フェイスの関係や、地域の情報に依存する傾向をもっている。このように特徴づけられる女性は、家庭領域から一步出たより広がりをもつ環境問題への関心は男性と比して希薄であって、現状では、日常的行動の積み重ねが認知枠組みを拡大させるところには至っていないことが明らかである。また女性の内部では専業主婦層が共同購入活動に熱心に関わり、日常的環境保全行動へのこだわりが有職女性と比べて明らかに強い。有職女性の日常的行動の実行率の低さは、時間的ゆとりと関わっている。男女および職業の有無による違いを視野にいれ、相互補完関係をどのように作りうるのかが、今後追求すべき課題となろう。

---

\*一橋大学社会学部

## 1. 本稿の課題意識

本稿では、女性の日常的環境行動を中心にとりあげて考察するが、まずはじめに課題意識について述べておきたい。本稿の背後には、「社会運動とジェンダー」というテーマの基底部分を明らかにしたいという課題意識がある。これはジェンダーという視角のもつ意義、および日常的行動をとる意義という二つの側面から説明される必要がある。まずジェンダーという視角については、従来のさまざまな社会運動の研究において明確には位置づけられず、性別のもつ意味がつきつめられてこなかったように思われる。とりわけ生命と生活の再生産に関わる社会運動領域における担い手は消費者運動等に代表されるように、その圧倒的多数が女性であることは周知のとおりである。それにもかかわらず、女性を主体的担い手とする運動の特質やそれによってかかるバイアスについて注意を向けない傾向が存在したのである。すなわちジェンダーが背中にはりついた主体に注意を向けるという問題意識が希薄であったため、性別不明の「住民」や「生活者」<sup>1)</sup>としてひとくりにされてきた。そこではなぜ女性が当面「住民」や「生活者」の代表として現れざるを得ないのか、あるいはそのことがもたらす運動上の特質や限界といった掘り下げられるべき課題に対して、問題意識が希薄であったと思われる。

しかしながら、たとえば生命と生活の再生産領域における社会運動において、女性がその担い手として多数派となるのは、明らかに性別役割分業構造のもとでの役割配当から必然的に生じてくることからである。ところが運動課題の本質に照らせば、当該の運動が「女性専科」として閉じられていることはむしろ運動に歪みや弱点をもたらす可能性がある。すなわち国民的運動課題に属するにもかかわらず、運動への男性のとりこみが不可能な状態のまま、「女性運動」としてくくられてしまうことによって生じる運動上の限界を不問に付してしまうのは、性別分業を当然の前提としているからである<sup>2)</sup>。このことは個々の社会運動の分

析を深める上での重大な欠落点であり、フェミニズムを中心とするジェンダー・センシティブな(性別にこだわった)視角の問題提起を受けることによってそのことが強く自覚されつつある。近年この問題を真正面に据えた研究が登場しつつある<sup>3)</sup>。そこでは女性の性別役割への拘束状況やアイデンティティの探求を行いつつ、政治主体としての女性主体の形成過程の考察に関心が向けられている。本稿は広くは、こうした問題意識の一角に位置づけられることができる。

また本稿において日常的な環境保全行動を考察の中心に据えようとするのは、上で述べたジェンダー・センシティブな視角と不可分であり、これを深めようとするからである。日常的環境保全行動としてわれわれが念頭に置いているのは、次のような行動内容である。使い終わったてんぷら油をそのまま流しに捨てないことや、洗濯に合成洗剤ではなく粉石鹼を使うこと、食器の油污れは拭き取ってから洗うことといった家事にかかわる日々のこまごまとした生活態度から、使い捨て商品を買わないこと、買い物に袋やかごを持参すること等の消費生活態度、そして電気をこまめに消したり、エアコンやクーラーの使用を控えるといった日々の節約行動を含んでいる。これらの行動は、社会運動にははるかにほど遠いレベルに属するが、運動にとってのもっともベーシックな基底をなすことは言うまでもない。日常的行動と公的発言内容が食い違うというようなことはしばしば起こりがちのことであるとは言え、社会的レベルでの環境保全をめざす運動と日常的に行動を意識的に習慣化させていくことは深く関連するのである。しかし本稿で注目するような日常的行動は客観的には社会的行動の基底であるとは言いうるとしても、個々の主体においては日々のこまごまとした雑事処理の一環であって、「環境保全行動」として自覚された行為であるとは限らないし、より広がりをもった社会的視野にただちに連動するとは限らない。だがおそらくさまざまなネットワークによる働きかけや知識・情報が両者を結びつけていく可能性があると考えることができよう。以下ではまずこうした主体内部における日常

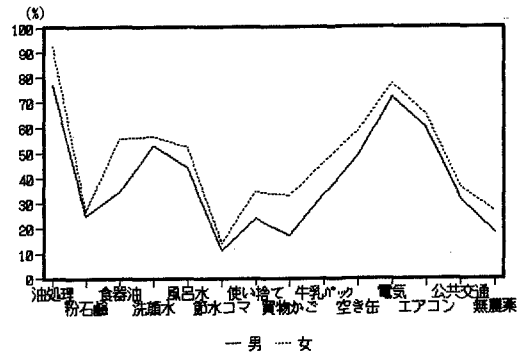
的行動が、性別とどのように関わっているのかをまず明らかにしたい。本章の焦点は上記の行動の直接的担当者である女性に置かれるが、こうした日常的行動のもつ意味を、より広がりをもった環境問題への関心そして集団的活動への参与、情報源などとの関連で考察してみよう。性別の分析にひき続いてさらに、女性内部に光をあて、女性というジェンダーにおけるこうした日常的行動のもつ意味を、現状の正確な把握を通じて考察してみたい。

したがって以下ではまず男女差という視点から考察し、次いで女性内部の差異に注目し、この規定要因を把握していきたい。そこでまずはじめに、ここでとり上げるデータの性格について簡単に触れておきたい。われわれのデータは女性670ケース、男性571ケースであるが、15年以上居住者は男性で44.8%、女性で41.8%となる。10年以上の居住者でとってみると男女それぞれ64.5%、65.2%となっており、男女ともに定住歴の長い層が多数派を占めていることがわかる。また表VII-1にみるように、女性のうち専業主婦が304、何らかの職業をもつ有職者が278となる。女性内部の差異をめぐっては、この二大グループに注目して分析してみよう。

2. 環境保全行動をめぐる男女差

環境保全に関する日常的行動をめぐって、性差はどのような影響を与えているだろうか。表VII-2および図VII-1に見るようにどの行動をとって

ても、女性の実行率の方が高いことが明らかである。今回のわれわれの調査では、家庭内役割の分担状況についての調査項目をあえて設定しなかったが、従来の各種調査からすでに明らかにされているように、現代日本における家庭内役割は、圧倒的に女性にシフトしている。この点を考慮するならば、われわれが設定した14項目の日常的行動の大半の担い手は女性であろう。男性回答者の大半は、自分自身の行動としてよりも、妻ないし母親の行動を思い浮かべて回答を寄せたものと推定される。したがって実態とのずれが女性の回答よりもあると考えることができるかもしれない。したがってこの数字からただちに女性の方が環境保全に対してセンシティブに行動していると結論を下すわけにはいかないが、日々の行動としての定着度も認知度も相対的には男性よりも高いと言うことができよう。この14項目のうち、女性の実行率が男性のそれよりも10%近く高いのは、「使い終わったてんぷら油などをそのまま流しに捨てな



図VII-1 日常的環境行動の実行率 (男女別)

表VII-1 男女別に見た職業 (%)

	課長以上	専門技術	事務	販売	サービス	労務生産	自由業	自営農林	自営商工	学生	専業主婦	退職失業
男	20.9	22.6	8.4	4.4	7.0	2.5	5.1	1.1	9.3	6.3	0.0	10.7
女	0.9	11.0	14.0	4.8	4.2	1.3	1.2	0.4	3.6	3.1	45.4	5.8

\*性別不明12名を除く

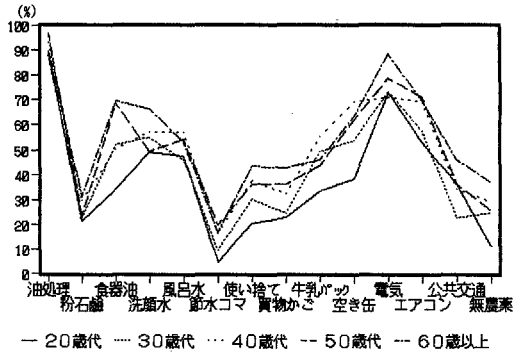
表VII-2 日常的環境行動の実行率 (男女別) (%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農薬
男	76.7	24.9	34.3	52.7	44.0	11.0	23.8	17.0	33.1	48.7	72.0	59.7	31.3	17.9
女	92.4	26.6	55.7	56.6	52.1	13.9	34.5	32.7	46.3	58.5	77.6	64.9	36.1	26.7

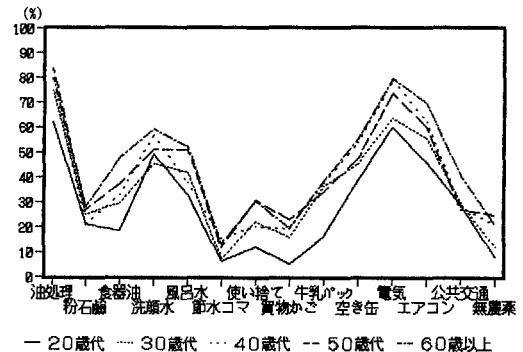
い」「食器の油污れは拭き取ってから洗う」「使い捨て商品は買わない」「牛乳パックのリサイクルに協力する」「空き缶・空きビンのリサイクルする」「無農薬食品を購入する」といった行動である。こうした項目はいずれも明らかに、日常の食事の支度や後かたづけ、そして買い物行動と深くかかわっているものであって、その主たる担当者たる女性が男性よりもこうした行動をより習慣化させていることがうかがえよう。

表VII-3、4および図VII-2、3から年齢別にみると、男女とも若干の例外はあるものの、年齢が高いほどこうした行動の実行率が高いとすることができる。若い世代よりも年配の世代の方がこうした行動を意識的に実行しているのである。した

がって20歳代は男女を問わず実行率は低く、ともすると30歳代の実行率もこれに似通った傾向を示している。このことはすなわち、古い世代の身につけている生活様式が、新世代のそれよりも環境保全行動にマッチした内容を伴っていることを物語っている。ただし注目しなければならないのは、50歳代、60歳代の世代のこうした行動がただちに、意識的な環境保全についての問題意識と連動しているわけでは必ずしもないという点である。この点は40歳代の女性に注目すると明らかとなる。この世代の女性は、どの年齢世代の男女よりも、「空き缶・空きビンのリサイクル」「牛乳パックのリサイクル」「洗濯に合成洗剤ではなく、粉石鹼を使う」「風呂水の再利用」の実行率がもっとも高い。こ



図VII-2 日常的环境行動の実行率 (年齢別、女性)



図VII-3 日常的环境行動の実行率 (年齢別、男性)

表VII-3 日常的环境行動の実行率 (年齢別、女性)

(%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電 気	エアコン	公共交通	無農薬
20歳代	88.5	21.3	34.4	49.2	47.5	4.9	20.5	23.0	33.6	38.5	73.0	53.3	36.1	11.5
30歳代	96.5	23.0	52.2	54.9	46.0	9.7	30.1	24.8	49.6	54.0	73.5	57.5	23.0	24.8
40歳代	93.0	29.9	50.3	57.3	57.3	16.6	37.6	32.5	55.4	69.4	71.3	69.4	34.4	29.3
50歳代	96.2	23.8	68.6	49.5	54.3	20.0	36.2	36.2	43.8	61.9	79.0	71.4	36.2	25.7
60歳以上	89.6	31.2	69.9	66.5	53.2	16.8	43.4	42.8	46.2	63.6	88.4	69.9	46.2	37.0

表VII-4 日常的环境行動の実行率 (年齢別、男性)

(%)

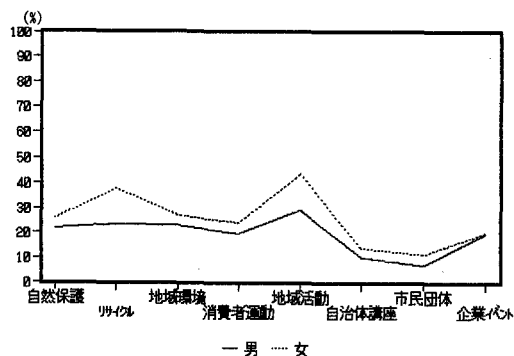
	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電 気	エアコン	公共交通	無農薬
20歳代	62.2	21.4	18.4	49.0	32.7	6.1	12.2	5.1	16.3	38.8	60.2	45.9	28.6	8.2
30歳代	75.0	25.0	29.6	45.4	41.7	7.4	22.2	15.7	36.1	45.4	63.9	55.6	29.6	12.0
40歳代	79.8	21.2	32.7	56.7	37.5	15.4	20.2	19.2	37.5	53.8	78.8	62.5	27.9	21.2
50歳代	83.9	27.1	37.3	50.8	50.8	11.9	30.5	22.9	33.9	47.5	73.7	60.2	27.1	24.6
60歳以上	79.7	28.0	47.6	59.4	52.4	13.3	30.1	19.6	38.5	55.2	79.7	69.9	40.6	21.0

これらの行動項目は、消費者運動等を中心として提起された生活様式を変革することを通じての環境保全行動と連動しており、こうした影響をもっとも強く受けてこれに呼応する行動を実施しているのは40歳代の女性であることが知られよう。したがって年配の世代が遵守している生活様式と中堅世代を中心とする意識的行動とが、日常的な環境保全行動を支えているとすることができるのである。

次にこうした家庭の内部で日々個人的に行われる行動が、環境保全にかかわる活動を行う集団・団体への参加および集団的行動とどのように関わっているのか。まず団体や社会的な運動・行動への参加状況を把握しよう。表VII-5および図VII-4によれば、自然保護・動物愛護の団体などに加

入しているのは男女ともきわめてわずかであるが、これに「署名やカンパに協力するていど」も加えて、何らかのかたちでコミットした経験がある人々についてみてみよう。企業のイベントを除く他のすべての集団的運動・行動において、男性よりも女性が多数かかわっていることが知られる。概してこうした社会的活動に対して女性の方が積極的にコミットしている姿がうかがわれるのである。先に見たように個人的な日常行動としての習慣化の程度も、また社会的な行動へのコミットという点でも、男性よりも女性の方が、はるかに積極的であると言えよう。特に目だっているのは、地域活動（女性の43.7%）やリサイクル活動（女性の37.5%）である。「全日制市民」として地域に根ざして、家庭内役割の担い手としての行動の延長線上で、リサイクル活動等に参加している姿をそこに見出すことができるのである。このように見てくれば、環境保全にかかわる実際上の行動は、個人的なものであれ、集団的なものであれ、女性の方が男性よりもよりアクティブであると見なすことができるだろう。

しかしながらこうした集団的行動と日常的行動とが、明確な環境保全という問題意識に導かれてリンクしているとは必ずしも言えない面がある。表VII-6、7に見るように男女ともに、団体活動参



図VII-4 集団行動参加率 (男女別)

表VII-5 集団行動への参加率 (男女別) (%)

	自然保護	リサイクル	地域環境	消費者運	地域活動	自治体講	市民団体	企業イベント
男	21.7	23.3	22.8	19.4	29.1	9.8	6.5	19.6
女	26.0	37.5	26.9	24.0	43.7	13.7	11	20.0

表VII-6 集団的行動参加別に見た日常的環境行動の実行率 (女性) (%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農薬
自然保護	95.4	34.5	59.8	64.9	58.0	16.7	36.8	43.7	55.2	67.8	77.6	67.8	37.9	40.8
リサイクル	96.4	33.5	58.6	62.9	63.3	17.9	43.0	42.2	60.6	75.3	79.7	68.9	38.6	37.1
地域環境	95.6	35.6	61.1	68.9	58.9	16.1	42.8	40.0	58.9	73.9	77.8	69.4	38.9	40.6
消費者運動	97.5	37.9	61.5	67.1	61.5	19.3	43.5	44.7	60.9	74.5	76.4	67.1	39.8	44.7
地域活動	95.6	32.4	64.5	61.8	61.1	19.5	40.6	37.9	56.3	79.2	79.9	69.3	36.5	36.2
自治体講座	93.5	40.2	68.5	66.3	62.0	22.8	42.4	45.7	58.7	76.1	77.2	69.6	41.3	42.4
市民団体	95.9	45.9	68.9	74.3	59.5	20.3	44.6	45.9	66.2	77.0	81.1	68.9	39.2	47.3
企業イベント	94.0	24.6	58.2	56.7	56.7	15.7	32.1	34.3	54.5	61.2	73.9	64.9	34.3	33.6

表VII-7 集団の行動参加別に見た日常的环境行動の実行率 (男性) (%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農薬
自然保護	79.0	33.9	47.6	57.3	52.4	12.9	30.6	27.4	41.1	56.5	74.2	60.5	33.1	27.4
リサイクル	81.2	34.6	43.6	57.9	59.4	18.0	37.6	31.6	51.1	72.9	76.7	67.7	33.1	30.1
地域環境	81.5	36.9	45.4	52.3	54.6	13.1	36.9	28.5	45.4	59.2	75.4	68.5	36.2	33.8
消費者運動	82.9	34.2	47.8	48.6	61.4	15.3	34.2	29.7	48.6	61.3	82.9	67.6	38.7	36.9
地域活動	83.1	29.5	42.8	60.8	59.6	18.7	31.3	27.7	51.8	69.9	78.3	60.2	30.7	22.9
自治体講座	80.4	28.6	48.2	58.9	58.9	26.8	39.3	30.4	53.6	66.1	85.7	58.9	33.9	23.2
市民団体	81.1	27.0	40.5	51.4	43.2	10.8	40.5	35.1	56.8	78.4	81.1	59.5	35.1	24.3
企業イベント	73.2	22.3	33.9	57.1	50.9	14.3	29.5	17.9	40.2	52.7	78.5	62.5	28.6	18.8

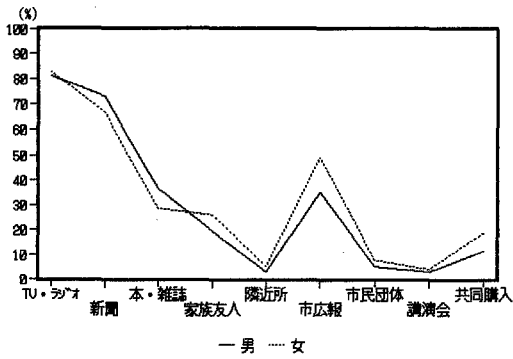
表VII-8 男女別に見た情報源 (%)

	TV・ラジオ	新聞	本・雑誌	家族友人	隣近所	市広報	市民団体	講演会	協同購入
男	81.3	73.0	36.6	19.1	3.0	35.0	5.3	3.0	11.4
女	82.7	66.7	28.4	25.8	5.1	49.0	7.6	4.2	18.7

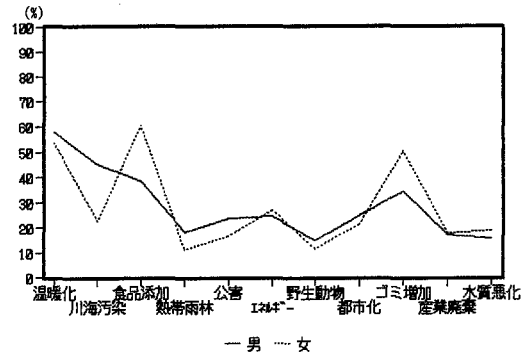
加と関わりなく高い項目は、「てんぷら油を流しに流さない」「電気をこまめに消す」「エアコンやクーラーの使用を控える」「洗顔水を出しっぱなしにしない」である。これらはとりわけ女性についてみれば60%以上の実行率となっている。これに対して男女とも集団的活動参加と関わりなく低いのは、「節水コマをとりつける」「自動車を利用せず、公共交通機関を使う」「合成石鹼ではなく、粉石鹼を使う」という項目である。明らかに前者の項目は、環境問題に対する高度な認識にもとづく行動というよりも、個人的に節約し無駄のない暮らしを心がけて実行しうる行動であると言えよう。これに対して後者は、単なる節約というレベルを越えた行動であって、生活の利便性よりも環境を意識して生活スタイルを変革しようとする行為に連なるものであると言えよう。われわれの調査の範囲では、こうした後者のタイプの行動を積極的に促進するようなきわだった団体活動参加体験を見出すことができなかつた。だがあえて、それぞれの団体活動への参加者における各々の日常行動の実行率の上位2位までの項目をチェックしてみると、次のような活動への参加が環境保全行動の高実行率と関わっていると見なすことができる。すなわち市民団体による学習会や観察会への参加者(女性で9項目までが上位二位、男性で4項目が

上位二位)、自治体による市民講座への参加者(女性は8項目、男性は6項目)、消費者運動への参加者(女性は4項目、男性は6項目)、リサイクル活動への参加者(女性は3項目、男性は6項目)、地域での環境問題にかかわる活動への参加者(女性は3項目、男性は5項目)となる。全体として見るならば、意識的な学習活動や運動にかかわっている人々ほど、日常的活動も活発であると言える。しかしながらその他の項目と比べてきわだっているわけではなく、せいぜい5%以内の差であるため、それが決定的な要因であると断定することはできない。だが、こうした集団的活動の拡大が、日常的な行動を喚起する可能性があることを示唆しているものと考えてよいだろう。その点では現在のところ、こうした諸活動への参加率の高い女性が、男性よりもその可能性をもっていると言えてさしつかえないだろう。

またこうした日常的环境保全行動をめぐるの情報源においても、男女差は明確である。表VII-8および図VII-5に見るように、女性の方が市の広報やニュースや家族や友人の話、および生協や共同購入では男性を上回るが、雑誌、週刊誌、本や新聞の記事では下回る。つまり男性は活字を主な媒体として認知する傾向が強いのに対し、女性の場合は生活に密着した地域や共同購入などの活動を



図VII-5 男女別情報源



図VII-6 男女別環境問題への関心

表VII-9 男女別環境問題への関心

(%)

	温暖化	川海汚染	食品添加	熱帯雨林	公害	エネルギー	野生動物	都市化	ゴミ増加	産業廃棄	水質悪化
男	57.8	45.0	38.4	18.2	23.5	24.5	14.7	24.7	34.5	16.8	15.4
女	53.4	22.4	60.7	11.2	16.6	27.0	11.6	21.3	50.3	17.6	19.0

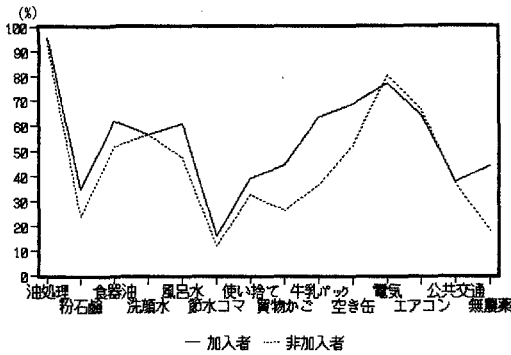
通して情報をキャッチする傾向が強いという差異が見られるのである。すなわち情報の網の目も性別役割配分に忠実なたちにはりめぐらされており、地域および生活密着型の情報源をもつ女性の日常的環境保全行動が、男性のそれよりも活発に行われているのである。

以上のように日常的環境保全行動をめぐる男女差が明確に存在しており、われわれの調査データの範囲で言えば現在のところ、女性が性別役割遂行の延長線上で情報や知識を得ながら、また地域や生活に密着した集団的活動を媒介としながら、日常的環境保全行動を遂行する主体となっている。しかしながらこうした日常的行為の積み重ねがただちに、より広がりをもった環境問題への関心を強めていくことになるとは限らない。表VII-9および図VII-6は、より広がりをもった環境問題への関心における男女差をみたものである。これによれば、女性の関心が男性を大きく上回っているのは「食べ物の中の食品添加物や残留農薬など」(女性60.7%、男性38.4%)や「家庭から出るゴミの増加」(女性50.3%、男性34.5%)である。これ以外ではおおむね男性の関心の方が高く、とりわけ、「河川・湖沼・海洋の汚染」では、女性22.4%に対して男性45.0%と大きく差が開いている。ここからみても、日常的環境保全行動の習慣化それ

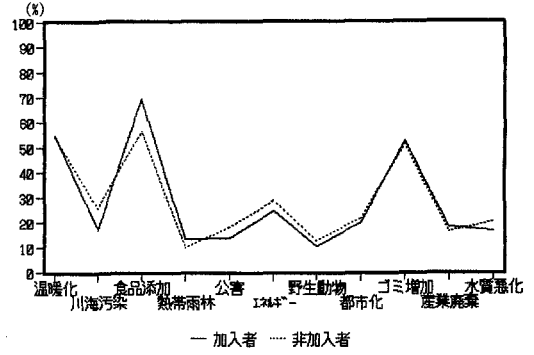
自体は、あくまでも性別役割の遂行と不可分一体のものであって、その積み重ねからただちに広がりを持った環境保全に対する関心が育つわけではないことが明らかであると言えよう。ただし意識的な学習活動や消費者運動、リサイクル運動等の活動への参加と日常的環境保全行動の実行率との関連がある程度見出せたということは、こうした活動・運動が、環境保全に対する問題意識を喚起する可能性があることを示唆するものであると言えよう。

### 3. 日常的環境行動と女性内部の差異

以下では男性よりも活発な日常行動を示し、しかも現在のところその実際的な担い手である女性に注目し、その内部における差異を考察しよう。そこでまず、日常的環境行動の実施率との間に一定の関連性を見出すことができた集団的活動の中から、生協等の共同購入を中心とした消費者運動をとり上げて考えてみよう。これをとり上げるのは、次の理由による。この消費者運動への参加状況をたずねる質問において、「メンバーとして活動している」という回答は女性のうちわずかに5.3%の人々が回答したのみであり、ほとんど問題にならない数字であった。それにもかかわらず、生協



図VII-7 日常的环境行動の実行率 (共同購入加入・非加入別、女性)



図VII-8 環境行動への関心 (共同購入加入・非加入別、女性)

表VII-10 日常的环境行動の実行率 (共同購入加入・非加入別、女性) (%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農薬
加入者	95.4	34.6	62.1	56.3	60.8	15.8	39.2	44.2	63.3	68.8	77.1	64.2	37.5	43.8
非加入者	92.1	24.1	51.6	56.3	47.4	11.9	32.3	26.2	36.2	52.1	80.4	66.4	36.8	18.0

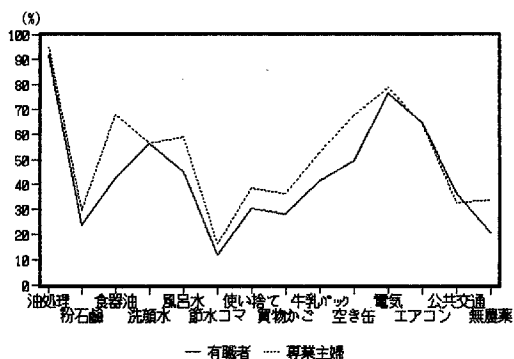
表VII-11 環境問題への関心 (共同購入加入・非加入別、女性) (%)

	温暖化	川海汚染	食品添加	熱帯雨林	公害	エネルギー	野生動物	都市化	ゴミ増加	産業廃棄	水質悪化
加入者	54.6	17.5	69.2	13.3	13.8	24.6	10.4	20.0	52.5	17.9	16.7
非加入者	53.7	25.9	56.6	10.1	18.0	28.6	12.4	21.7	50.8	16.4	20.4

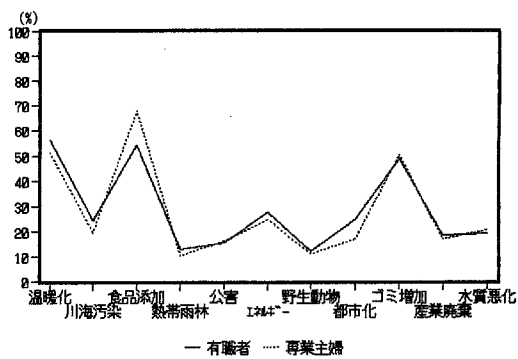
などの共同購入団体に加入しているか否かをたずねたところ、女性全体の41.0%が加入していると回答しており、非常に高い参加率となっている。このことはすなわち生協等の共同購入組織への加入それ自体を、消費者運動への参加とは認知していない人々が多数を占めていることを意味している。それにもかかわらず、これだけの数の加入者をもつこの種の集団的行動が、どのように女性の日常的环境保全行動と関連しているのかを深めることは興味深いテーマであり、データのにも意味があると思われる。そこで共同購入への加入者が非加入者とどのような行動的差異を見せているのかを、検討してみよう。表VII-10および図VII-7に見るように、「洗顔などのとき水を出しっぱなしにしない」だけは、共同購入組織への加入・非加入を問わずまったく同一の実施率であるが、これを除くすべての日常的环境保全行動において、生協加入者が高い実施率をマークしている。特に両者の間に10%以上の差のある項目を拾ってみると、「合成洗剤ではなく、粉石鹼を使う」(加入者で

34.6%、非加入者で24.1%)、「油汚れは拭き取ってから洗う」(62.1%、51.6%)、「風呂水を再利用」(60.8%、47.4%)、「買い物に袋やかごを持参する」(44.2%、26.2%)、「牛乳パックのリサイクル」(63.3%、36.2%)、「無農薬食品を購入する」(43.8%、18.0%)となる。こうした点をもみても、生協加入者には明らかに、積極的に日常的行動を行う意識的な人々が多いとみることができよう。しかしながら先にも触れたように、より広がりをもった環境問題への関心へとこれが連なっているとは必ずしも言えない。表VII-11および図VII-8に見るように、「食べ物の中の食品添加物や残留農薬」への関心が加入者の69.2%に対して非加入者が56.6%となっており差異が明確であるが、このほかにはほとんど差異は見出せない。加入者の方が非加入者よりもむしろ関心が低い項目もある。たとえば、「河川・湖沼・海洋の汚染」(加入者で17.5%、非加入者で25.9%)、「排煙や排水、騒音などの公害」(13.8%、18.0%)、「資源やエネルギーの無駄使い」(24.6%、28.6%)、「野生動物の減少」





図VII-9 就労状況別に見た日常的環境行動の実行率 (女性)



図VII-10 就労状況別に見た環境問題への関心 (女性)

表VII-12 就労状況別に見た日常的環境行動の実行率 (女性) (%)

	油処理	粉石鹸	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農薬
有職者	91.4	23.7	42.4	56.5	45.0	11.9	30.2	28.1	41.4	49.3	76.6	65.1	36.0	20.5
専業主婦	94.7	29.6	68.1	56.3	58.9	16.1	38.2	36.2	52.6	67.8	78.9	64.5	32.6	33.6

表VII-13 就労状況別に見た環境問題への関心 (女性) (%)

	温暖化	川海汚染	食品添加	熱帯雨林	公害	エネルギー	野生動物	都市化	ゴミ増加	産業廃棄	水質悪化
有職者	56.1	24.5	54.3	12.9	15.5	27.7	12.2	24.8	48.6	18.3	19.1
専業主婦	51.0	19.7	67.8	10.5	16.4	24.7	10.9	16.8	50.3	16.8	20.7

(10.4%、12.4%)、「水道水の水質の悪化」(16.7%、20.4%)などである。したがって生協等の共同購入への加入自体も性別の延長線上での日常的問題意識の範囲に限定されており、個人的レベルでの熱心な行動には結びついて、より広がりをもった環境問題への関心を育て上げるきっかけになってはいないことが明らかである。多くの生協加入者の性格は、食品添加物や残留農薬を食卓に乗せたくはないという問題意識が強く、その限りで、日々の環境保全行動にもこだわりを見せる人々であるとは言える。しかし、食卓への強い関心は、水道水や、空気等への関心へとつながることが可能であるようにも思われるのだが、必ずしもそこにまでは問題意識が結びついていないのが現状であると言えよう。

次に女性内部における、有職者と専業主婦との間の差異を見てみよう。表VII-12および図VII-9によれば、日常的な環境保全行動のうち、有職女性の方が専業主婦の実行率をわずかながらも上回っているのは「洗顔のとき水を出しっぱなしにしな

い」(有職者で56.5%、56.3%)、「エアコンやクーラーの使用を控える」(65.1%、64.5%)、「自動車を利用せず、公共交通機関を使う」(36.0%、32.6%)である。これ以外のすべての項目において、有職女性よりも専業主婦の実行率が高いという結果になっている。両者の間に特に10%前後の開きがあるのは、「食器の油汚れを拭き取ってから洗う」(有職者で42.4%、68.1%)、「風呂水を再利用している」(45.0%、58.9%)、「牛乳パックのリサイクルに協力する」(41.4%、52.6%)、「空き缶・空きビンをリサイクルする」(49.3%、67.8%)、「無農薬食品を購入する」(20.5%、33.6%)となる。こうした、とりわけ手間暇をかけなければならない項目における専業主婦の実行率の高さに、注目しなければならない。これは有職女性と比べての専業主婦の生活における時間的ゆとりと深く関わっているものと思われる。

ところで専業主婦層と有職女性層との間に、より広がりをもった環境問題に対しての関心の差はどの程度であろうか。表VII-13および図VII-10によ

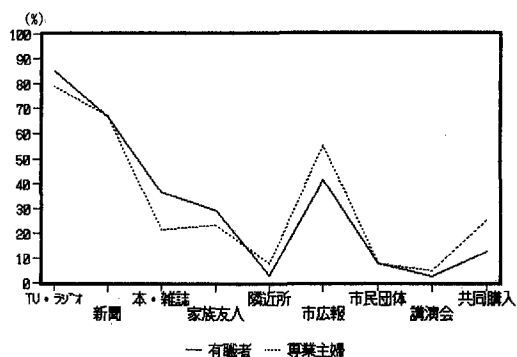
表VII-14 就労状況別に見た情報源(女性) (%)

	TV・ラジオ	新聞	本・雑誌	家族友人	隣近所	市広報	市民団体	講演会	共同購入
有職者	85.3	66.9	36.7	29.1	2.9	41.4	7.6	2.5	12.6
専業主婦	78.9	67.1	21.4	23.4	7.6	55.3	7.6	4.9	25.3

れば、特に目だつ差としては、専業主婦層の方が「食品添加物や残留農薬」に67.8%が関心を示しており、有職女性の54.3%を大きく引き離している。これ以外では両者の間に顕著な開きは見られず、ほぼ似た傾向にある。このことは先にも触れたが、日常的环境保全行動の実行率の高さが、より広い環境問題への関心を引き起こしては必ずしもないことを意味するものである。またこうした行動に関連する情報源については、表VII-14および図VII-11に見るように専業主婦層と有職女性層とを比べると、前者はすでにみた情報源の女性タイプに近く、後者は男性タイプに近い傾向(表VII-8および図VII-5)が認められる。すなわち専業主婦層に生活・地域密着型の「市の広報やニュース」や「家族や友人」「生協や共同購入」が多いのに対して、有職女性は、「雑誌、週刊誌、本」や「新聞の記事」といった活字によるものがやや高い比率を占めているのである。したがって有職女性と比べて専業主婦は、地域と生活に密着したライフスタイルを維持しており、情報源もそれに強く引っ張られるかたちで確保し、手間暇をかけた環境保全のための日常的行動を習慣化させている傾向が見られる。これに対して有職女性は男性タイプに近い情報源をもつとともに、日々の労働と生活に追われてか、環境保全にかかわる日常行動の実行率が低くなっていると言えよう。そしてこの層にあっては、男性タイプの情報源の特徴をもつが、より広がりをもつ環境問題への関心については男性と比べれば、図VII-11と前掲図VII-6との比較によって明らかなように、より女性型にシフトして生活・地域密着型であると言いうことができるだろう。このことは働きに出ることを通じて男性型に情報源が傾いたとしても、日常生活における性別分業構造に固く規定されるために、家事・育児役割の延長線上でものごとを認識し把握する習慣そのものは女性型のままであって、この点を

表VII-15 就労状況別に見た共同購入加入者(女性) (%)

	加入者	非加入者	不明
有職者	26.6	65.8	7.6
専業主婦	44.1	49.0	6.9



図VII-11 就労状況別に見た情報源(女性)

専業主婦層と共有していることを意味するものと言えよう。

この専業主婦層と有職女性層との、生協等の共同購入への加入状況との関連を把握してみよう。表VII-15によれば、有職者のうち加入者は26.6%にすぎず、非加入者は65.8%となる。これに対して専業主婦層にあっては加入者が44.1%、非加入者が49.0%となっている。専業主婦層における共同購入への加入者の比率が、有職者のほぼ1.7倍にも及ぶのである。これまでの調査データの範囲で見れば、専業主婦層のうちとりわけ生協等の共同購入組織に加入している層がもっとも熱心な日常的环境保全活動を行う主体であることが知られよう。有職女性の場合は時間的ゆとりのなさゆえか、共同購入加入率も、そしてまた日常的环境保全行動の実行率も低い。有職女性が増大しつつある中で、こうした層から環境保全に関する問題関心をいかに引き出すのかという点は、重要な課題となろう。

#### 4. まとめにかえて

以上のように見てくるならば、専業主婦という存在が日常的环境保全行動にとって持つ意味が浮

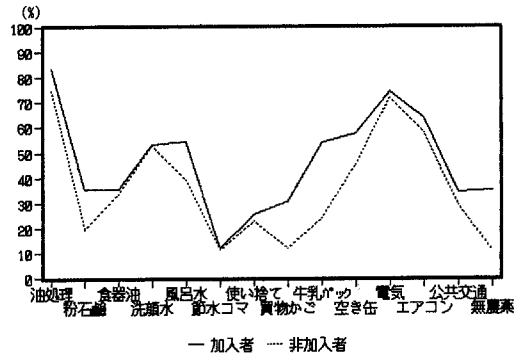
表VII-16 日常的环境行動の実行率（共同購入加入・非加入別、男性）

(%)

	油処理	粉石鹼	食器油	洗顔水	風呂水	節水コマ	使い捨て	買物かご	牛乳パック	空き缶	電気	エアコン	公共交通	無農業
加入者	83.4	35.5	35.5	53.3	54.4	11.8	25.4	30.8	53.8	57.4	74.6	63.9	34.3	34.9
非加入者	74.6	19.7	33.6	52.7	39.1	10.9	23.0	11.7	24.0	45.5	71.9	57.9	29.2	10.7

かび上がってこよう。性別役割分業によって割り当てられた家事・育児役割を遂行する女性の中でもとりわけ、ライフスタイルの特徴とゆとりから専業主婦層が日常的环境保全行動ともしっかりなじみ深い存在であり、共同購入活動にもよく参加していることが明らかである。ではこうした専業主婦層を中心とした日常的行動スタイルが、他の家族員にどのような影響を与えているであろうか。そうした行動が家事・育児役割の担い手としての専業主婦ひとりの手によって担われるにとどまり、他の家族員にインパクトを与えていないとすれば、そうした行動は性別分業の枠内に閉ざされたものということになる。そうではなく、家族員に何らかの影響を与えるようなものになっているとすれば、専業主婦のそうした努力は自己完結的なものではなく、周囲に波及効果をもたらすことになる。

この点を男性回答者から探ってみよう。ただしわれわれの調査では、男性回答者の母親もしくは妻が専業主婦であるか否かを問う設問を用意していなかった。そこでここでは共同購入への加入の有無を手がかりにして考えてみよう。先に見たように共同購入加入者の女性は日常的环境保全行動を非加入の女性よりも熱心に行っており、しかも専業主婦の比率が高いことがすでに明らかにされている。表VII-16および図VII-12は、男性回答者による共同購入加入の有無別の日常行動実行率を示したものである。男性回答者にとって、「共同購入に加入している」という回答はおそらく本人自身ではなく、妻もしくは母としての女性が直接それに関わっているものと推定される。わが国の生協等の共同購入活動の中心部隊が、性別分業構造の固い規定を受けて、おおむね女性を主役としていることが明らかであるからである。したがって男性回答者のこの問いに対する回答の大半は、「(妻・母が)加入している(もしくは、していな



図VII-12 日常的环境行動の実行率（共同購入加入・非加入別、男性）

い)」と読み替えるべきものであろう。そのように解釈しながらデータを読むと明らかに、加入者の方が日常的环境保全行動の実行率が高い。そして図VII-12のカーブは、女性の共同購入加入・非加入別のカーブ（前掲図VII-7）と比べると、加入者の男性と女性とでは、男性の方が数値は女性より下まわってはいるが、ほぼ同一の形を描いている。ところが、非加入の男性回答者はもっとも低い位置でカーブを描いている。このことは、加入者の場合には、妻もしくは母の実行率がそもそも高く、男性回答者は仮に自分自身が直接実行しないまでも、ある程度そのことを認知していることを意味すると思われる。つまりそれだけ、専業主婦を中心とし、共同購入加入者層の日常的な環境保全行動への取り組みが、他の家族員にも少なくともある程度は認知されており、一定の影響を与えていると見ることができよう。専業主婦や共同購入に加入する女性たちの日常的な努力が、家族員の範囲にもそれなりの影響力をもっていると言いうことができるであろう。

しかしながらこれまで考察してきたように、女性、とりわけ専業主婦を中心とした日常的环境保全行動の習慣化も、彼女たちの視野をさらに広げた環境問題への関心へと連なってはならず、個人

的努力の範囲と社会的視野にたつ問題認識とがただちには連動しないことが明らかである。彼女たちの「食卓」への関心が「食品添加物や残留農薬」への関心と深く関わっていたように、日々の生活へのこだわりが、どのような回路を通じてより広がりある問題関心を育てて行くのかを探ってみることは必要なことであろう。地域・生活密着型の活動や情報源により多く依拠している女性、とりわけ専業主婦層は、そうしたタイプの集団的活動への参加体験を通じて、個人的日常的行動が喚起される可能性を秘めているのである。ここでむしろ問題になるのは、有職女性において、地域・生活密着型からの離脱傾向が、行動面においても情報源においても見出せた点である。もちろんだからといって就労を契機としてただちに男性型への移行を意味するのではなく、性別役割分業構造のもとにおかれているがゆえに、母親役割および主婦役割に規定されて基本的には地域・生活密着型の女性タイプをあくまで基本においている。しかし職場と家庭という二重役割の制約を強く受けて、日常的環境保全行動に傾ける努力は時間的にも希薄とならざるを得ない。今回のわれわれの調査データにはこの点がはっきりと現れている。今後、この有職女性たちはいっそう拡大していくものと予測されるが、そのことが、日常的に台所を

中心とした家庭で行われる環境保全行動を空洞化させる危険があるとも言えよう。とは言え、基本タイプが性別分業のもとで女性型であることは、ゆとりと条件が与えられれば、専業主婦層と似た行動パターンをとる可能性があることを示唆している。最後に男性の場合は、日常的環境保全行動への関心は、彼らの家事・育児役割への参入によってしか獲得されえないであろうし、この問題はそれ自体として追求すべき課題であることは言うまでもない。とりあえず現状では、行動も情報も生活・地域密着型の女性と、男性のマス・メディア型情報源ルートから得られる広がりある問題関心が、どのようにドッキングし、相互に影響を及ぼし合っているのかを考えてみる必要がある。

#### 注

- 1) 「生活者」についてはたとえば、佐藤慶幸編(1988)『女性たちの生活ネットワーク』文真堂。
- 2) 生命と生活の再生産領域における女性担い手層の位置づけについては、木本喜美子(1986)「日本の婦人運動と夫婦」(布施晶子ほか編『現代家族の危機と再生』第一巻、青木書店)を参照のこと。
- 3) その代表的なものとして矢澤澄子編(1993)『都市と女性の社会学』サイエンス社。

#### Key Words (キー・ワード)

Gender (ジェンダー), Environmental Behavior at the Everyday-Life Level (日常的環境行動), Social Movement (社会運動)

Women's Environmental Behavior :  
Research Report on the Consciousness for Water Environment of Residents in Tokyo (7)

Kimiko Kimoto\*

\*Faculty of Social Studies, Hitotsubashi University  
*Comprehensive Urban Studies*, No. 54, 1994, pp. 89—101

This paper investigates women's actions for preservation of environment in the everyday life. This is because we believe that the research on social movements should be approached from a 'gender-sensitive' perspective. It should be also emphasized that actions in the everyday life are the real basis of social movements.

Our main findings are as follows. Women are more active for preservation of environment both at the everyday-life level and at the community level. Women also tend to obtain the environmental information from personal contact and communities rather than from printed materials. On the other hand, women tend to be less active in more social, public sphere than men. Another point is that housewives participate in preservation of environment in the everyday life more actively than working women who have less time for the activities.

It would be very important to find a way how housewives, working women and men can complement one another in preservation of environment.